『 Falling In Love 』

ジン・ココノエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『Ｆａｌｌｉｎｇ　Ｉｎ　Ｌｏｖｅ』

【Ｎコード】
Ｎ７６０８Ｖ

【作者名】
ジン・ココノエ

【あらすじ】
作者が「なのは」で最初に書いた、記念品的な作品。
おそらく世にも珍しい『クロノ×すずか』というＣＰであり、
実は作者自身が何故このＣＰで書いたのか分からなかったりするという…。

※この作品は別途で私が管理しているサイトから軽い修正を加えたうえでの転載になります※

☆★

……まいった。

どうやら自分で思っていた以上に重症のようだ。

あの日、紅い瞳の彼女を見てからというもの、彼女の姿が頭から片時も消える事なく残っている。

月の光に照らされた彼女は本当に綺麗で……声をかけられるまで見惚れてしまっていた程だ。

この気持ちが『恋』という物なのだろうが……驚きだな。

なにせ自分はそういった物とは生涯縁の無い物だと思っていたのだから……

「……ただいま」

「おかえりなさい、クロノ」

「ただいま、母さん……フェイトは？」

アースラを出た時間を考えればもう帰っているはずなのだが……

「フェイトさんは今日はなのはさんの処にお邪魔してくるって」

「そうか……アルフも一緒に？」

「アルフさんははやてさんのお家ね」

「あぁ、ザフィーラの処か」

「最近あの二人ずいぶん仲がいいのよね」

「いい事じゃないのか？」

頭の中には子犬の姿でじゃれあう二人――いや、二匹の方が正しいのか？――の姿。

「そうね、悪いよりはずっと良いわよね」

「？」

「さ、夕食の準備もできるし席に着いていて？」

「あ、あぁ……」

食事中、最近艦で起きた某騎士と某執務官の模擬戦で艦が沈みかけた事、某戦技教導官と某司書の喧嘩で艦が沈みかけた事等を話す。

……騒動を起こした連中には始末書と一緒に掃除を押し付けておいたが。

母さんからは『フェイトに好きな人ができたらしい』という事をそれはもう嬉しそうに聞かせてくれた。

どうやら母さんは相手を知っているらしく、僕の表情を見て楽し

んでいる。
僕としてはいきなりそんな話を聞かされて複雑な気分なのだが……いや、嬉しいのは嬉しいのだが。

「そういえば、クロノは気になってる娘とかいないの？」

そう唐突に言われ、脳裏に一人の少女が浮かぶ。

初めて会ったのは何年か前に家に遊びに来た時だっただろうか。
確か勉強会をやっていた時だったな、休憩の為に出てきた彼女が寄ってきて……
それでその時に少しだけ話をして、その後ちょっとした事で彼女の『秘密』を知り親交を深める事になった。

何年も前の事を思い出し少し苦笑する。
あの時は彼女に……否、僕自身誰かに恋をするとは思いもしなかったな。

そんな僕をいつもの様に微笑んで見ている母さん……だが目だけは探るような瞳で僕を見ている。

気付かれただろうか。
……動揺を隠すようにできるだけ表情を隠そうと試みる。

「……なぜそんな事を聞くんです？」

「気になるじゃない、貴方って可愛い子が近くに何人もいるのに浮いた話の一つも聞かないし……」

気取られるな、気取られるなよ……

気取られれば相手は思いつく限りの手段を以って相手の名前を知ろうとするだろう。
それで迷惑がかかるのが僕だけならまだいいが、彼女に迷惑がかかるのだけは御免だ。
「…………残念ながら、今しばらくはご期待にはそえないかと」
「そう……残念ねぇ」
嘘は言ってないはずだ……少なくとも彼女とはまだそういった関係ではない。
……なぜか彼女のご家族からは了承を貰ったが。
そんな久しぶりの母との会話を楽しみつつ、明日の事を思う。
「そういえば明日休みを取ったんだが、何か買っておく物とかはあるかな？」
「……クロノが自分から有給の消化なんて珍しいわね」
驚いたと言うより、心底意外そうに言われた。
「……ついさっきエイミィにも言われましたよ」
「だって今までいくら言っても休もうともしないし、無理矢理休ませれば鍛錬ばかりで……」
「…………否定はしません」
しかしそこまで言われるほど酷かったただろうか。

過去の自分を思い出し……確かにそうだったなと思い、苦笑してしまった。

「で、明日はどうするの？　久しぶりの休みなんでしょ？」

「えぇ、少し買物に出て後は図書館に行こうかと」

「そう、私はちょっと本局の方に出ちゃうけど、お昼は大丈夫かしら？」

「そうですね……最近あまり顔も出していませんから、翠屋にお邪魔しよ……」

「お土産お願いね♪」

「…………分かりました」

土産か……シュークリームをいくつか包んでもらうかな、母もそうだが義妹も好きだったはずだ。
後は以前いただいたコーヒー豆も少しいただこう……最近よく飲むようになったせいかそろそろ無くなるはずだ。

——――さて、少し早いがそろそろ寝よう。
明日だって彼女に会えると決まっているワケじゃないんだし、気楽に行こうじゃないか。

翌朝、普段通りの時間に起き、仕事の為に家を出る母を見送る。

「……買物に出るのは昼前でいいか」

どうせ昼食は外で食べるのだし、買物のついでに寄った方が効率的だろう。

そう思い、デバイス『S2U』を解体し整備を始める。

最近では恩師から譲り受けたデバイス『デュランダル』を使用する事が多いのだが、

この長年使ってきた相棒とも言えるデバイスの整備を怠る事は無かった。

「ふぅ……こんなもんかな」

整備の終わったS2Uを起動させ簡単な点検を行い、異常が無い事を確かめ待機状態にする。

「さてと……思ったより時間がかかったが出かけるとするか」

着替えながら頭の中でどの順で買物をすませるかを考え家を出る。

とくに問題なく買い物を終わらせ、本来の目的地である図書館へと向う。

会う約束をしようにも彼女の連絡先を知らず、知っているであろうフェイトに聞くにしても理由を問われると答えに困る。

彼女もいきなり知らない番号から電話が来ても困るだろうし、最悪出ても貰えないだろう。

それならば直接家に行けばいいのかもしれないが、正直な話あそ

こに行くには少し勇気がいる……色々な意味で。
……何せ普通に入ろうとした筈なのに、何故か蜂の巣になりかけたのだから。

だからできれば此処に居てくれると助かるんだが、会えなかったら運が悪かったと諦めるしかないな。
そんな事を考えながら図書館内を歩き…………見つけた。

「やぁ、久しぶり……かな」

「ぁ、クロノさん……こんにちわ」

「あ、あぁ……こんにちわ」

優しげな微笑みを浮かべ挨拶してくる彼女に鼓動が早まる。
…………本当に重症だな、挨拶だけでこの様か。

「今日はどうしたんです？」

「ん、偶にはこっちの本も読もうかと思ってね……何かお薦めの本とかはあるかな？」

ここで『君に会いに来た』と言えればどんなに楽か……

「そうですね、クロノさんは好きなジャンルとかあります？」

「いや、特には無いな……大抵のものならなんでも読むから」

……ほとんどが実用書だったが、これは言わないほうがいいんだろうな。

「そうですか、それなら――――」

『一緒に回りませんか？』と言われ、一緒に館内のいろいろな場所を回り本を選んでいく。

ほとんどは彼女が選び、僕があらすじなどを聞き興味があったら持つといった感じではあったが……

選び終わり、貸し出し手続きを終わらせたものの、その重量はなかなかのものだった。

冊数はそれ程ではないのだが一冊一冊が厚くしっかりとした装丁のため、重量があるのだ。

いっその事家に転送してしまおうか……そう思い、悩む。

「クロノさんは今日この後のご予定は？」

「ん……あぁ、後は昼食をとりに翠屋に行こうと思ってたくらいだが？」

……

彼女に嘘を吐く理由は無い。

まぁ、これがエイミィ相手ならば適当にあしらう事もあるのだが

誘ってみるか？　行き先は幸い翠屋だ、変な誤解や警戒をされる事も無いだろう。

そうだな……ダメで元々、誘うだけは誘ってみよう。

「もし良ければ……」

「良ければご一緒してもいいですか？」

彼女は今なんと言った？　……僕の聞き間違いか？
いや、そんな事は無いだろう、僕の耳は優秀だ。
そうそう幻聴など聞いたりはしない。

「ぁ……もしかして誰かと待ち合わせされてましたか？」

彼女の表情が曇る。
拙い、勘違いさせてしまったか……

「いや、大丈夫だ。そうだな一緒に行こうか」

「はい♪」

さきほど曇った表情が嘘のように笑顔に変わる。

笑顔になった彼女を見てほっとする。
彼女と一緒にいるのは落ち着く。
落ち着くというと少し違う気もするが、心が穏やかになるのは間違いない。
それが彼女が持ってる雰囲気のおかげなのか、それとも僕が彼女に対して抱いている気持ちのせいなのか……

そんな事を思いながら彼女と共にのんびりと図書館を出る。

此処から翠屋までの道のりはそう長くは無い。
あちらに着けば恐らくは二人でいるのは無理だろう……なぜかそんな気がする。
だから今ここで聞いておきたい……他人のいる状況では少し聞き

辛い事だしな。

「なぁ……」

「……どうかしましたか？」

足を止め話かける僕に合わせてか彼女も足を止める。

「また今度、今日のように会っては貰えないだろうか」

二人きりで、とそう思うが言葉には出さない。

「…………ぇ」

驚いたような反応。
まぁ、僕のような人間にいきなりそんな事を言われれば驚きもするか。

「すまない……迷惑だったなら忘れてくれ」

先程の言葉ではほとんど告白したも同然じゃないか。
まぁ、言ってしまった以上は手遅れだし今更言い直すのも変だろう。
それに何より、僕自身が彼女と一緒に居たいと思っている事は変えようの無い事実だ。

「ち、違うんですっ、そんな事を言われるなんて意外で……それに私なんかと一緒じゃ面白くなんてないでしょう？」

「そんな事はない」

「だって私なんて地味だし面白い話もできないし……」

それは僕だって一緒だ。
昔から仕事ばかりで、面白い話や気のきいた話等今でも全くできる気がしない。

「他の人間がどうであれ、少なくとも僕は君と一緒に居たいと思っているし……何より君だから僕は好きになったんだ」

「ぁ……」

彼女の双眸に涙がたまる。

「……泣く事は無いだろう？」

そう言って抱き寄せる。
抵抗すればすぐに腕が外れるように、逃げられるように……力は入れずに。
正直、本当はこんな人目のある場所でするのは恥ずかしいんだが……
してしまった以上は仕方ない、せめて知り合いが近くを通らない事を祈るか。

「だって、嬉しくて……ごめんなさい、すぐに止まりますから」

「いいさ、落ち着くまでこうしているさ」

「……すみませんでした」

時間にすればほんの数分。
まだ少し瞳に涙が残る彼女が顔をあげる。

「それで……どうだろうか？」

正直な処、答えを急かしたくは無い。
……早く聞きたいと思う反面、拒否されたらと思うから。

「クロノさんは……私なんかでいいんですか？」

弱々しく服を掴んでいた彼女の力が少しだけ強くなる。

不安……なんだろうか？

「なんかじゃない、君だから一緒に居たいんだ」

「…………絶対に離さないでくれますか？」

そう言って微笑む……瞳にいくらか残っていた涙が頬をすべり、落ちる。
そんな彼女を改めて綺麗だと、そう思いながら彼女を抱く力を少し強め……

「あぁ、勿論だ」

彼女と共に在ると、そう約束する。

「これからよろしくお願いしますね、クロノさん」

「あぁ、あまり頼りにはならないかもしれんが、こちこそよろしく

頼む」

言って、お互いに笑みを交わす。

しかし何だ……視線を感じる。
視線を上げ、回りを見る。

「…………」

頬を一筋の汗。
通り過ぎる人の視線が……痛い。
それはそうだろう、こんな処でこんな事をしていれば……
とりあえずこの場を離れるべきか。
少し名残惜しいが……

「……すまない。少し移動しようと思うんだが」

「え？」

僕の唐突な一言に何かを感じたのだろう。
回りを見て……固まる。
これだけ視線を集めているんだ、それが普通の反応だろう。

「そういうワケだから」

僕の言葉に彼女は無言のまま頷く。
彼女が頷くのを確認した僕は、左手には荷物を持ち、右手に彼女の手を取り走り出す。

向かうのは臨海公園……少し距離はあるがゆっくり話すにはちょうど良い場所だ。

く……何を話せばいいんだ。

先程までの勢いはどこへやら……
臨海公園に着いた後はどちらも緊張か気恥ずかしさが先に立ち会話が中々成立しなかった。

全く無かったワケではない。
ただ長続きしないのだ……それは相手への遠慮か今の状況への不安か。

元々どちらも話し上手というワケではないので、仕方ないと言えば仕方ないのかもしれない。

ちなみに手は走り出した時のまま、未だ繋いだままである。
気付いてないのか、それとも無意識にそうしているのやら……

そのまま公園内を歩き、海の見える場所に着いた後、最初に口を開いたのは彼女の方だった。

「でも良かった」

「何がだ？」

「私、クロノさんに嫌われてるんじゃないかって思ってた時期もあるんですよ？」

「そんな事は無い、むしろ僕の方が嫌われているのではないかと不安だったさ」

あまり愛想のいい方では無いからね、と付け加え苦笑する。

「ね、クロノさん？」

「どうかしたのか？」

「えっと……ちゃんと言って無かったから、ちゃんと言いますね」

無言で頷き、先を促す。

「クロノさんの事、好きです」

笑顔でそう言い切った。

「本当はずっと前から言いたかったんです。けど断られるのが怖くてずっと言えなかった」

「それは僕も同じだよ」

そう、同じだ。

今だってまだ信じられないくらいだ……こうやって言葉を交し合っているのが。

「こんな私でも好きでいてくれますか？」

「言っただろう？　僕が一緒に居たいと願うのは他の誰でもなく、君だと」

「……はい」

「何が起ころうとも必ず君の元に帰る事、そしてこの命が尽きるその時まで一緒に居る事を誓うよ」

今の仕事を考えれば絶対などありえない……が、それでも誓いたいと思った。

「絶対ですよ？」

「あぁ、約束しよう」

そう言って彼女を抱き寄せ……僕達は初めてのキスをした。

――――end.

☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★

☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★

（後書き）

過去作品の加筆は真面目に辛い…。

私の場合は過去作品のが出来が良い傾向がある様な気もするので余計に。

何にせよ最後までお付き合い頂けた皆様に感謝を…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7608v/

『 Falling In Love 』

2011年11月11日13時35分発行